言葉にしたことが、現実になるマイク

牧葉　犹(元那由他餓鬼)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
言葉にしたことが、現実になるマイク

【Ｎコード】
Ｎ６９１５ＢＶ

【作者名】
牧葉　犹（元那由他餓鬼）

【あらすじ】
言葉にしたことが、現実になるマイク――それは本物？　偽物？

（前書き）

久しぶりの投稿です。ちょっと今までとは気色を変えて。
それから、主人公の言動にご注目。

「言葉にしたことが、現実になるマイク？」

そんなのあり得ない、と思って、私は圭佑の持っている「それ」をしみじみ眺めた。

「だって、商品名にそうやって書いてあるし」

圭佑自身も、あり得ないと思っているようで、首を傾げて困惑したように頭を悩ませている。

私は圭佑の持っていた「それ」を受け取って、改めてじっくりと観察する。

――随分古ぼけた、私の顔の大きさぐらいある箱だった。圭佑がひいおじいちゃんの倉庫から引っ張りだしたもので、ほこりをたくさん被っている。くり抜かれたように一部分が透明になっていて、中に入っているマイクの姿を見せていた。マイクは持ち手が赤色の、いたって普通の『おもちゃ』のマイクだ。箱の商品名は、さっきも圭佑が言ったとおり、「言葉にしたことが、現実になるマイク」だ。箱に印刷されているイラストには、マイクに話しかけた男性の後ろに、宇宙人の乗ったＵＦＯが現れている。これはつまり、男がマイクで宇宙人を呼び出した、ってことなのだろうか。

「ふん、馬鹿馬鹿しい」

私は鼻を鳴らして、そのイラストを睨みつけた。

「何にもギミックが無いから、せめてもインパクトのある商品名にして、ちったでも小銭を稼ごうって算段なんでしょ」

日本人ってほんと昔から小賢しい――私は嘲笑してやりたい気分になった。

圭佑は少し考え込んだように、私の持っていた箱を眺めて、

「姉ちゃん、それ貸して」

と、私が持っていた箱を取り上げた。

私はまだ何も返事をしていないのに！　と少々憤慨してしまうけれど、ここで文句を言ってしまうと、その箱に未練があるように思われる気がして、私は何も言わなかった。

圭佑はしばらく箱を弄んで、何かを探しているようだった。やがて箱に貼られていたセロハンを見つけた圭佑は、唐突にそれを剥がしに掛かった。

「ちょっとアンタ、まさかそれ使う気じゃないでしょうね？」

私が言い咎めると、

「ちょっと試してみるだけだよ。ちょっとだけ、ね」

圭佑はそう言いながらセロハンを剥がし、箱を開けて、中のマイクを取り出した。箱の中には他にも、取り扱い説明書らしきものと、小さな、マイクロＳＤカードみたいなチップが入っていた。

圭佑はその取扱説明書とチップを見比べて、しばらくすると取り扱い説明書を放り出して、マイクとチップをもって何やらカチャカチャやりだした。

私は圭佑が放った取り扱い説明書を拾い、途端にうげえ、と苦々しい表情になってしまう。

そこには大真面目な感じで、言葉にしたことが現実になる、とい

う仕組みについて解説が書かれていた。しかも私が想像した以上に専門用語のオンパレードで、一行目からとても読めたもんじゃない。日本人なら日本語を使って欲しいと切に思う。

「よし、出来た！」

圭佑が快哉の声を上げて、私は取扱説明書から顔を上げた。

「あとはこのスイッチを上に押し上げれば、言葉にしたことが、現実になるんだ！」

圭佑はマイクを感嘆の思いで見ている。――相変わらず純粋で、疑うという事を知らない。これは私が、現実の厳しさというものを教えてやるべきだろう。

圭佑はマイクのスイッチを押し上げると、小さく息を吸った。そこを私が横から、

「地球に隕石を落とせ！」

と言って邪魔した。

「な、何言うんだよ、姉ちゃん！」

圭佑が悲痛な声をあげる。まさかとは思うが、本当に隕石が落ちて来るなんて思ってないだろうな。私はマイクを持った圭佑に近づいて、こう言った。

「大丈夫よ、こんなマイクに話しかけたって、絶対に何も実現しないから。これまでも、そしてこれからも――ね」

圭佑はぶんぶんと首を振って、マイクに話しかけた。

「お菓子をたぁーくさん、出して！」

そして数秒。いち、に、さん。

……やはりというかなんというか、何も起きなかった。

「そんなあ……」

圭佑はすっかり脱力したように、マイクを見下ろした。小学三年生にもなって、今だにサンタの存在を疑った事のないような奴だから、多分本気で落胆しているんだろう。私はふん、と鼻を鳴らした。

「さあ、こいつはひいじいちゃんの倉庫に片付けるわよ！」

私はマイクを圭佑の手からかっさらうと、電源を落として、丁寧に箱に戻した。

「はあい……」

圭佑は奇妙にしょんぼりしながら、箱を持って倉庫に戻っていく。

「まあまあ、一つベンキョウになったでしょ」

私は半ば勝ち誇ったような気持ちになりながら、圭佑の肩を叩き続けた。

＊＊＊

その夜、地球の真横を、月の半分位の大きさの隕石が、通り過ぎていった事は、二人の知る由がない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6915bv/

言葉にしたことが、現実になるマイク

2013年11月2日00時53分発行